

アダム・スミスとスコラ論理学

篠 原 久

序

筆者は前稿でスミスの「レトリック講義」をとりあげ、それが18世紀に生じた「新しいレトリック」の先駆となっていることを指摘した。この *New Rhetoric* は、古典的なキケロのレトリックにみられるトピックの装置や、技術的立証、弁論の六部門構成などを批判しつつ、古典的な弁論文のほかにも、歴史的、詩的文章構成、ならびに学問的伝達の理論をもとり入れた包括的なものであり、同時に、具体的な文芸作品をとりあげながら、レトリックの基礎にみられる *Human Nature* をさぐろうとするものであった。ところでこの講義は、グラスゴー大学では、最初に論理学の講座において行なわれた。ジョン・ミラーの報告によれば、スミスはこの講座では、大部分を「レトリックとベル・レトル」にあてたが、それに先立って「古代論理学について、かつて広く学者たちの注意をうばっていた技巧的な推理方法を、好奇心を満足させるに必要なだけ説明した」¹⁾ もようである。現在では、スミスの論理学講義の内容を知る由もないが、ただ、スミスの遺稿集である『哲学論文集』の中の「古代論理学・形而上学史」が一つの参考になると考えられる。スミスは1751年1月に論理学教授に就任し

-
- 1) 抽稿「アダム・スミスとレトリック」『経済学論究』第29巻第4号、昭和51年2月。
 <New Rhetoric の先駆者>という指摘は、ハウエルの次の論文に従ったものである。W. S. Howell, "Adam Smith's Lectures on Rhetoric: An Historical Assessment," *Speech Monograph*, vol. XXXVI, 1969. この論文は、『スミス記念論文集』*Essays on Adam Smith*, ed. by A. S. Skinner and T. Wilson, 1976の冒頭に収録されている。
 - 2) Dugald Stewart, *Biographical Memoir of Adam Smith*, *Collected Works of D. Stewart*, 1858, vol. X, p. 11.

アダム・スミスとスコラ論理学

た際に、「観念の起原について」*De Origine Idearum* という題で講演を行なったが、その実質的な内容が「古代論理学・形而上学史」の中に含まれていることである。¹⁾

スミスの新しいレトリックは、旧来の論理学（スコラ論理学）と密接に結びついていた古いレトリックに対する批判であった。したがってそれは、当然、中世のスコラ論理学への批判でもある。本稿は、このことの意義を、スミスの学問体系（学問区分論）とかかわらせて明らかにしようとするものである。

I 「哲学研究指導原理：天文学史、古代物理学史、古代論理学・形而上学史による例証」

「古代論理学・形而上学史（による例証）」は、「哲学的研究を指導する諸原理」という共通のタイトルの下に、「天文学史による例証」、「古代物理学史による例証」のあとに置かれているものである。これら三論文の順序は、人間的好奇心が向けられる対象のそれを反映したものである。

「あらゆる自然現象のうちで、天界の現象は、その偉大さと美しさのゆえに、人類の好奇心のもっとも普遍的な対象である。」²⁾スミスはこう述べることによつて、「天文学史による例証」に入ってゆく。³⁾人間は、異常な現象、新奇な事物に接した場合、それらを孤立なままにしておくと、不安、苦痛の念にかられるので、従来人間がよく親しんできた事物および現象に関係づけることによって、

- 1) F. W. Hirst, *Adam Smith*, 1904, p. 23, 遊部久藏訳『アダム・スミス』弘文堂昭和27年, 26ページ。
- 2) *The Early Writings of Adam Smith*, ed. by J. R. Lindgren, 1967, p. 53.
- 3) 「哲学的研究を指導する諸原理：天文学史による例証」は、表題のない短かい序説的部分と四つの節（§ 1. Of the Effect of Unexpectedness, or of Surprise, § 2. Of Wonder, or of the Effects of Novelty, § 3. Of the Origin of Philosophy, § 4. The History of Astronomy）に分かれているが、これらのうちの第3節までは、共通のタイトル「哲学指導原理」全体への「序文」と考えられるべきものである。この構成上、あるいは編集上の不備については、すでに出口教授の指摘がある。出口勇蔵「アダム・スミスの『哲学小論集』について」『経済論叢』第108巻第3・4号、昭和46年9・10月、6ページ。

アダム・スミスとスコラ論理学

こういう不安の念を取り除こうと努力する。この場合、できるだけ少数の、しかも人間がよく慣れ親しんでいる原理で、自然界の、外見上ばらばらになっている諸現象を関係づけようとする。こういう努力のなかから、System (学説体系)¹⁾ が作り出される。スミスはこれを「想像上の機械」にたとえているが、要するにそれは、共通の話題に関して、人々がそれがない場合よりも、ずっとスマーズに、より首尾一貫して話しあえる共通の場という性格をもっている。スミスは古代からニュートンまでの天文学の諸体系を、それらがどういう契機から構築され、どのようにして世間に受け入れられ、さらにどういう状況の下でそれらが人々から拒絶されるようになり、まったく別個の新しい体系に取って代わられるかという過程を考察している。この場合にスミスの関心は、それらの体系がどの程度真理に近づいているかということではなくて、「それらの各々が、どの程度、想像 imagination を和らげ、自然の舞台を、あるがままに見える状態よりもずっと首尾一貫した、したがってずっと雄大な光景にするように適合されているか」という観点にある。この「天文学史」は、D. スチュアートのいわゆる「理論的・推測的歴史」Theoretical or Conjectural History の代表作の一つにされているものであって、スミスはこの「哲学的歴史」への

1) *Early Writings*, p. 66.

2) *Ibid.*, pp. 45—6. すなわちスミスは「同心球体系」「離心球体系」「コペルニクス体系」「ニュートン体系」などを知識の蓄積過程とみるよりも、古いシステムから、新しい連結原理（見えざる鎖）を中心におく新たなシステムへの変遷の過程とみるのである。

3) Dugald Stewart, *op. cit.*, pp. 34—5. スキナーは、スミスの「天文学史」の内容と Thomas S. Kuhn の *The Structures of Scientific Revolutions*, 1962 (中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年) の基本的テーゼとの酷似を指摘している。「クーンと同様にスミスは、そのわく内で展開が行なわれ（クーンのいう通常科学への道）、ついには、まず危機状態に、次いで革命に襲われる（つまりパラダイムの他のパラダイムによる代替）ところの systems (paradigms) を用いて論述を展開している。」A. S. Skinner, "Adam Smith. Science and the Role of the Imagination." in *Hume and The Enlightenment; Essays presented to Ernest Campbell Mossner*, ed. by W. B. Todd, 1974, p. 180. またかれは、新しい『スミス全集』の『国富論』の「総序」で次のように述べている。「この論文〔天文学史〕は、動機づけ motivation の問題にかかわるものであって、そのこ

アダム・スミスとスコラ論理学

興味を終生いだきつづけ、広範囲な著作分野にそれを適用しようとしていたのである。

「天空の体系 *System of Heavens* を整理し組織だてることから、哲学は自然の下部領域、つまり地球とそれを直接にとりまく物体を考察するために下降した」と述べて、スミスは「古代物理学史」の領域に入ってゆく。ここにみられる対象、たとえば「雲、虹、雷鳴、いなずま、風、雨、ひょう、雪などの大気現象」および「化石、鉱物、動植物」などは、天空にみられる対象、つまり「太陽、月、惑星および恒星」にくらべて、偉大さと美しさにおいて劣っているにしても、それらの生成のしかたや継起の秩序はほとんど無限の多様性を有しているので、それらを観察した際に、想像は「しばしば当惑させられ、その自然的な経路からなげだされる」ことがずっと多いであろう。「自然の偉大な舞台のこの下部領域を想像にとって首尾一貫した光景にするためには、第一に、この領域を構成しているあらゆる見慣れない対象物が、心意にもっともなじみの深い少数の対象物から構成されており、そして第二に、それらのあらゆる性質、作用および継起の秩序が、これらの第一次的かつ基本的な対象物において、心意が長いあいだ慣れ親しんできたものがさまざまに多様化したものにはかならないと想定することが必要であった。」こういう想定の中から、エンペドクレスの「四元素説」が提唱されるのである。というのは、「われわれがその上を踏みつける土、毎日使用する水、常に呼吸する空気、そして一般的な生活必需品を調理するためだけではなく、動植物を活動させる生命原理を継続的に継持するためにも、その恵み深い作用が要求されるところの火」が自然の下

とによって、思想家としてのスミスの意欲 *drives* について、われわれに多くのことを語り……かれの他の諸著作が事実上とっている形態をわれわれが理解するのに貢献している。」 Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Glasgow Edition, 1976, 'General Introduction', p. 1.

1) *Early Writings*, p. 109.

2) *Ibid.*, p. 110.

3) *Ibid.*

4) *Ibid.*, pp. 110—11.

アダム・スミスとスコラ論理学

部領域を構成していると思われるあらゆる物体のうちで、われわれにもっともなじみの深いものだからである。さらに事物の基本的な性質である熱と寒 **hot and cold**, 湿と乾 **moist and dry**, 軽と重 **light and heavy** も以上の四元素から説明され、空気中のさまざまな現象が、これら四元素とその性質の混合から関係づけられる。¹⁾ スミスはこの体系について、次のようなコメントを加えている。「かれらの結合の諸原理はなるほど、しばしば実体の件わないのであり、この上もなく不明瞭で漠然としたものではあったが、それらは科学の黎明期に予想されるようなものであり、またそれらのあらゆる不完全性にもかかわらず、それらがない場合に、かれらがなしたであろう度合いよりもずっと首尾一貫して、それらの一般的対象物について人類を思考させ、語らしめることができるようなものだったのである。」「古代物理学史」の後半部分では、「宇宙を形づくった知的存在」についての諸学説が検討される。この「最初に全体を形成し、私的な個体を顧慮することなく、全体の保存と繁栄に向けられた一般的法則によって全体を支配する、あらゆるものとの神の普遍的な精神という考え方」は宇宙が完全な機械 **complete machine**, 首尾一貫した体系 **coherent system** とみなされた後に思いつかれたものであった。

「古代論理学・形而上学史」はこの「古代物理学史」をうけて、論理学が物理学つまり自然哲学から発生したことが指摘される。一元素の他元素への転化、または一化合物の他の化合物への転化に際しては、素材 **Stuff or Subject matter** と、種、種的本質あるいは実体的形相 **Species, Specific Essence, Substantial Form** の二者が考慮に入れられねばならないが、一物質をして、その物質たらしめるものは後者なのである。⁴⁾ だから、事物のこの種的本質が何に存するかをつきとめることが哲学の本分になる。しかもこの種的本質は、一

1) *Ibid.*, p. 112, 114—15.

2) *Ibid.*, p. 115.

3) *Ibid.*, pp. 117—18. 「無知が迷信を生んだように、科学が、天啓によって教化されていなかつた国民のあいだに生じた最初の一神論を生じさせた。」 *Ibid.*, p. 118.

4) *Ibid.*, pp. 122—24.

アダム・スミスとスコラ論理学

個としての対象物に固有なものではなく、その対象物と同種類のあらゆる他の対象物とも共通なものであるから、あらゆる場合において、「個体」 Individuals ではなく、「種」 または「普遍なもの」 Species or Universals が哲学の目的となる。¹⁾ こういうふうに古代の哲学の内容を追ってきたあとで、スミスは学問区分の発生について次のように述べる。

「物質界において生じるすべてのさまざまな出来ごとを関連づけるために、事物のあらゆる特定の種の性質と本質 Nature and Essence of every particular Species of things が何に存するかを決定することが物理学、すなわち自然哲学の本務であったように、わたしが今しがた述べてきたところの自然哲学の体系からもともと生じたものではあるが自然に関する知識が伝達されるべき順序ではそれに先行すると考えられた他の二つの学問 sciences があって、そのうちの第一の形而上学は〔物理学の場合と同様に〕 諸普遍概念 Universals の一般的性質と、それらが区分されてゆくところのさまざまな部類 sorts and species を考察した。第二の論理学は、この形而上学の学説の上に築かれ、諸普遍概念と、それらが区分されてゆくところの諸部類の一般的性質から、あらゆる特定の対象が一般的部類 general classes に分類されてゆく一般的法則をつきとめ、それぞれの個々の対象がどのクラスに属するかを

1) *Ibid.*, p. 124. 感覚の対象である個体が、感覚の作用とは無関係に外的に実在すると考えられたように、悟性の対象である種的本質も、悟性の作用とは無関係に外的に実在すると想定されたところから、プラトンは神 Deity がそれらの外的な本質 external essence を模範 exemplars にして、世界とその中のあらゆる感覚的対象物を形成したと考えたばかりでなく、種的本質つまり「普遍なもの」自体が、感覚的世界とは別個に実在すると主張したのであった (*Ibid.*, pp. 126—28). 以下、この種的本質の性質をめぐって、アリストテレス、ストア学派の見解が紹介されている。スミスは非常に長い脚注で、このプラトンの external essence を「神の精神の観念」 Ideas or Thoughts of the Divine Mind と誤って理解するようになった後期プラトニストたちの不注意をきびしく批判している。「あらゆる言語において、実体や実在を表わすことばは思考または観念のみを表わすそれとは正反対のものではないのか。……したがって、もしもそれらの外的な種 external species が神の精神の観念にすぎないのであれば、プラトンはいかなる適正さをもって、それらを現存する事物として語りえたのか。」 *Ibid.*, p. 127.

アダム・スミスとスコラ論理学

決定しようと努めた。というのは、このことの中に哲学的推理の全技術が存すると十分正当にも理解されたからである。これらの二つの学問のうち、第一の形而上学は、第二の論理学にまったく従属しているので、両者はアリストテレスの時代以前には同一のものとみなされ、両者のあいだから、われわれがひじょうによく耳にするがそれについてはほとんど理解していないところの古代の弁証術 *ancient Dialectic* がつくりあげられたように思われる。この〔形而上学と論理学の〕分離に対しては、かれの門人たち、つまり古代の逍遙学派の人々によっても、また古代の哲学者たちの他のどの学派によってもあまり注意が払われなかつたように思われる。後のスコラ 哲学者たちは、なるほど本質論 *Ontology* と論理学の区別を設けたが、かれらの本質論は、アリストテレスの形而上学的諸著作の主題の小部分しか含んでおらず、その主題の大部分、つまり普遍概念の学説、および定義と区分の技術へのあらゆる入門的なものは、¹⁾ ポリピュリオスの時代以降、かれらの論理学の中に吸収された。」

以上の、初期のスミスの学問区分の叙述の中に、後日かれが『国富論』において展開したところの中世の学問体系批判の伏線が横たわっている。そしてその根底にはスコラ論理学批判があった。

II 学問区分と論理学

スミスは『国富論』の第五編で、古代ギリシャの学問体系が、自然哲学（物理学）、道徳哲学（倫理学）、および論理学の三大部門に分かれていたことを指摘し、こういう一般的区分は「完全にものごとの本性に一致しているとおもわれる」と述べている。²⁾ ところが中世ヨーロッパの大学においては、この哲学の三大区分は、五部門、つまり論理学、気学、本質論、道徳哲学、物理学への区分

1) *Ibid.*, p. 124—25.

2) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, Cannan's ed., vol. II, p. 256 (v.i.f. 23), 水田洋訳『国富論』河出書房新社、昭和40年（下）191ページ。なおカッコ内は前掲グラスゴー版表示の編、章、節あるいはそれ以下の項目、パラグラフ数を示したものである。以下同様。

アダム・スミスとスコラ論理学

にかえられた。その理由は、スミスのいうところに従えば、こうである。物理学（自然哲学）は、もともと **Body**（物体、肉体）に関するものばかりではなく、**Spirit**（靈、精神）に関するものもとり扱っていたのであるが、ヨーロッパの諸大学において、哲学は神学のしもべにすぎないと考えられるにいたり、**Spirit**（human mind, Deity）についての部門、つまり「形而上学あるいは氣学」**Metaphysics or Pneumatics** が独立せしめられ、**Body** をあつかう部門の物理学そのものと対置されるようになり、しかもずっと崇高なものとみなされるようになった。¹⁾ 物理学と氣学がこのように対置されるようになったとき、これら「ふたつの科学の主題の双方に共通な性質と属性をとりあつかう科学」である本質論 **Ontology** が生み出された。スミスによれば、「手くだと詭弁が、

- 1) 「古代の哲学においては、人間精神のあれ神のあれ、本性〔自然〕についておしえられたことは、すべて、物理学の体系の一部分をなした。それらの存在は、その本質がなににあると想定されたにしても、宇宙のおおきな体系の諸部分であり、もっとも重要な諸結果をうみだす諸部分ででもあった。人間理性がそれらについて結論あるいは推論したことは、すべて、宇宙のおおきな体系の起源と運行について説明をあたえると称した科学の、いわばふたつの章をなしていた。」 *Wealth of Nations*, vol. II, p. 258 (v.i.f. 28), 邦訳(下) 192ページ。この引用文の内容は、「古代物理学史」の後半部分によって例証されている。 *Early Writings*, pp. 117—22. 本稿47ページ参照。
- 2) この形而上学や氣学においては、「少数のひじょうに単純でほとんど明白な真理のほかには、もっとも注意ぶかい配慮でさえも、あいまいさと不確実さ以外のなにも発見しえず、したがって手くだと詭弁 **subtleties and sophisms** 以外のなにもうみだしえない、そういう問題がおおいに発展させられたのである。」 *Ibid.*, p. 258 (v.i.f. 28), 邦訳(下) 193ページ。
- 3) 『オックフォード英語辞典』 *O.E.D.* においては、本質論と氣学は次のように説明されている。 **Ontology** : 存在 **being** に関する科学あるいは研究。形而上学のうちに事物の存在あるいは本質、もしくは抽象的な存在にかかわる部門。 **Pneumatics** : 灵もしくは靈的存在に関する科学、学説あるいは理論。17世紀には、一般的形而上学、つまり本質論に対して、特殊形而上学と呼ばれる形而上学の一部門を形成するものと考えられ、自然的理性によって知られる神、および天使や惡魔、そして人間の靈についての学説を含んでいた。18世紀の哲学上の傾向によって、超自然的存在に関する学説が無視されるにつれて、氣学は人間の靈のみを扱うようになり、<人間の靈あるいは精神の性質と機能に関する科学、つまり今日のいわゆる心理学>を意味するようになった。……〔用例〕 1814, D. Stewart, [Elements of the Philosophy of the] *Human Mind*, II, Concl. 485 「したがって、私は本書を<論理学あるいは氣学>ではなくて、<人間精神の哲学>の綱要と名づけた。」

アダム・スミスとスコラ論理学

諸学校〔つまりスコラ学派—引用者〕の形而上学あるいは氣学の大部分をなしていたとすれば、それらは、本質論というこのくもの巣のような科学 **cobweb science** の全部をなしていたのであって、この科学もときには同様に形而上学とよばれた¹⁾のである。道徳哲学の内容の変化も、以上の自然哲学のそれに対応するものであった。古代の道徳哲学においては、人間生活の諸義務は、人間生活の幸福と完成とに役だつものとして論じられ、徳の完成は、それをそなえた人に対し、現世における完全な幸福を必然的にもたらすものと説明された。ところが自然哲学とともに道徳哲学も、神学の手段としてのみ教えられるようになると、人間生活の諸義務は、主として来世の幸福の手段としてとりあつかわれ、徳の完成も、一般に現世におけるいかなる程度の幸福とも両立しないものとして説明された。だから「天国は、ざんげと禁欲によって、修道僧の謹厳と謙虚によってのみ、かちえられるのであって、人間の自由で寛大で活気ある行動によってではなかった」²⁾のである。こうして、決疑論と禁欲的道徳論 **casuistry and ascetic morality** が中世の大学の道徳哲学の大部分を占めていたのであって、「哲学のさまざまな部門のすべてのなかで、とびぬけてもっとも重要なものが、このようにして、とびぬけてもっとも腐敗したものとなつたのである。」³⁾以上のように学問区分の変化の原因が考察されたあとで、ヨーロッパ諸大学の教育課程が、スミスによって次のように述べられる。「論理学がさいしうにおしえられ、第二に本質論がきた。人間の魂および神の本性にかんする学説を内容とする氣学が、第三にきて、第四には、道徳哲学の堕落させられた体系がつづいた。この体系は、氣学の諸学説、すなわち人間の魂の不死性および神の正義から来世でうけることを期待すべき賞罰と、直接にむすびついているとみなされた。物理学のみじかくて皮相な体系が、たいてい、この課程のさいごであった。」⁴⁾

1) *Wealth of Nations*, vol. II, p. 258 (v.i.f. 29), 邦訳(下) 193ページ。

2) *Ibid.*, p. 259 (v.i.f. 30), 邦訳(下) 193ページ。

3) *Ibid.*, 邦訳(下) 193ページ。

4) *Ibid.* (v.i.f. 31), 邦訳(下) 193—94ページ。

アダム・スミスとスコラ論理学

さて、われわれがここで問題にしたいのは、論理学と他の学問との関連である。『国富論』においては、論理学の起原は、自然哲学や道徳哲学の各体系の支持者たちが、みずからの体系を、他の対立する諸体系から擁護しようとする努力のなかに求められているが¹⁾、論理学と本質論、気学との関係は十分明瞭にはされていない。ただ、本質論と気学とが形而上学の一種であることは指摘されている。『哲学論文集』においては、「古代論理学・形而上学史」という表題から示唆されるごとく、論理学と形而上学はおおむね、一つのものとされており、結局は普遍概念 *Universals* の性質をとり扱う学問とされている。事実、この「古代論理学・形而上学史」は、次のようにして、五つの普遍概念を列举することで終っているのである。物体の特定のクラスに宿っている種的本質、つまり普遍的性質 *universal nature* が哲学の対象となるものであるが、それはわれわれの感覚の対象ではなく、悟性 *understanding* によってのみ知覚される。しかしながら、われわれが個々の対象物の種的本質について判断を下すのは、感覚的諸性質 *sensible qualities* によってであり、これらの諸性質は、特性 *Properties* と付帯性 *Accidents* とに分けられる²⁾。さらに個々の対象物の種的本質自体は、分類上、二つの部分、つまり類 *Genus* と種差 *Specific Difference* に分けられる³⁾。したがって、「これら四つと、種的本質つまり種

- 1) かれらは「当然に、かれら自身の体系に反対する諸体系を支持するために提示される議論の、弱点をばくろしようと努力した。それらの議論を検討するにあたって、かれらは必然的に、可能的な議論と証明的な議論、まちがった議論と決定的な議論とのあいだのちがいを考慮するにいたった。こうして、この種の点検がうみだした諸観察から必然的に、論理学、すなわちすぐれた推理とわるい推理とについて的一般的諸原理の科学が、生じてきたのである。」*Ibid.*, p. 257 (v.i.f. 26), 邦訳(下)192ページ。
- 2) 特性とは「それが存在するか否かによって、それらの感覚的諸性質が必然的に生じてくるところの *external form* が存在するか否かが示されるようなもの」とみなされ、付帯性とは「それが存在するか否かが、そのような必然的な帰結をもたらさないようなものである。」*Early Writings*, p. 134.
- 3) 種差は、特定の対象物が属するところのクラスに特有な性質のものであり、類は、このクラスと上位のクラスとに共通の性質をもつものである。両者の関係は、形相と素材とのそれにたとえられる。「これら二つの部分〔つまり類と種差〕が *Specific Essence* に対する関係は、素材と *Specific Essence* [つまり形相] が各々の個々

アダム・スミスとスコラ論理学

Species それ自体とで、スコラ学派において、類 **Genus**, 種 **Species**, 差異 **Differentia**, 特性 **Proprium**, 付帯性 **Accidents** という名でよく知られていた五つの普遍概念 **Five Universals** の数を構成している。¹⁾

『国富論』にみられる哲学の五部門の最初の三つである論理学、気学、本質論は、もともと自然哲学から発生したものであるが、それらはいずれも **Universals** の性質をとり扱うところの論理学(=形而上学)の下に一括されるべきものであった。そして、スミスの列挙した五つの普遍概念を基礎におく論理学が、スミス当時にいたるまでヨーロッパ中世全般を通じて、哲学(=学問)のあらゆる部門の土台におかれていたのである。このことの意味を、以下、節を改めて検討してみたい。

III スコラ論理学と **Universals**

さきほど引用したところの「古代論理学・形而上学史」における叙述にしたがえば、アリストテレスの形而上学的諸著作の大部分を占める普遍概念の学説、および定義と区分の技術へのあらゆる入門的なものは、ポリピュリオス(234—305)の時代以降、スコラの論理学の中に吸収された。ところでこのポリピュリオスの主著が『イサゴーゲ』(入門書)²⁾であって、これは、別名「五つの語につ

の物体に対する関係とほぼ同じである。各々の物体に含まれる **universal matter** [素材]が、諸物体の特定のクラスの **Specific Essence** [形相]によって限定され、決定されるのとほとんど同様に、……類は種差によって限定され、決定される。」*Ibid.*, p. 135.

- 1) *Ibid.*
- 2) 「古い注釈家たちの多くはこれを、すべての哲学への入門とか、すべての知識への入門と解する。その理由としては、すべての哲学書の前に『カテゴリア論』が、そしてその前に本書が読まれるべきであるからだと、語を知ることはものを知ることへの手引きとなり、そして本書で解説された五つの語は、すべての哲学用語がそれに帰するところの基本的な用語であるからだと、哲学はすべての知識を指導するが、本書は、哲学への入門書なので、ひいてはすべての知識への入門書であるとか説明されている……この小さな書物は……ボエティウスのラテン語訳〔6世紀〕によって、ヨーロッパ全中世を通じて哲学の基本的な書物の一つとなつた。」『世界の名著』続2「プロティノス、ポリピュリオス、プロクロス」中央公論社、昭和51年、解説51ページ。

アダム・スミスとスコラ論理学

いて」ともいわれ、類、種、差異、特性、付帯性について解説したものである。スミスが **Universals** と呼んだこれらの「五つの語」は、中世の学界においてどのような役割をはたしていたのだろうか。ハウエルは、スコラ論理学の中核は「別名、五つの共通語 **five common words** と呼ばれた **predicables** (述語形態)¹⁾」であるとして、次のように述べている。

「これらの五つの共通語は、命題が、文法的な意味においてではなく、科学的な意味においてもつ五つの **predicates** (賓辞) をあらわす術語である。つまり、どのような叙述も、それが類、種、差異、特性、あるいは付帯性の叙述として分類されうる時に、学問の領域に入る資格を得る。そのように分類されえない叙述は、真実で有用であるかもしれないが、厳密な科学的叙述ではないので、科学の世界での地位を与えられることができないのである。……ある命題が、ある種をその類に結びつけ、その種がどのようにその類と異なっているか、そしてその種がどういう特性をもっているかを述べ、かつこれらの手順が正しくおこなわれていれば、その命題は永久に真実のものである。²⁾」

さらに、スコラ論理学においては、この五つの共通語と関連して、一般語 **general words** と呼ばれるカテゴリー、あるいは **Predicaments** (客位語) が存在していた。これは実体 **Substance** と付帯性 **Accident** とに大別される。

- 1) W. S. Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500—1700*, 1956, p. 17. ハウエルは、トマス・ウィルソンの *Rule of Reason*, 1551 (これは英語で書かれた最初の論理学書とされている。) の内容解説という形をとりながら、スコラ論理学の概要を紹介している。
- 2) *Ibid.*, pp. 17, 18, たとえば「人間は、生来、話す能力をもち、理性をさずけられた動物である。」A man is a living creature endowed with reason, having aptness by nature to speak. という叙述は、種(人間)が類(動物)に關係づけられ、差異(理性の賦与)によってその類の他の成員から区別され、かつ特性(話す能力)を与えてられているので、永久に疑いえない真実の命題となる。そして種に付帯性が結合された(たとえば「若干の人間は白人である」Some men are white. というような)叙述は、時おり真実にすぎない命題となる。 *Ibid.*, p. 18.
- 3) 実体とは、事物の存在や性質にとって絶対不可欠なもの、つまり「それがなければその事物がそのものでありえないようなもの」であるのに対して、付帯性とは、通常は事物にそなわっているものではあるが、「事物の存在や性質にとって絶対不可欠なものとはかぎらない」ようなものである。 *Ibid.*, p. 19. この区分はスミスが

アダム・スミスとスコラ論理学

さらに後者は9のカテゴリー、つまり量、質、関係、能動、受動、時、場所、位置、状態に細分され、これらは実体とあわせて「スコラ論理学の10のカテゴリー」*the ten predicaments [=categories] of scholastic logic* と呼ばれた。これらのカテゴリーは、「五つの共通語」が定義や区分にかかわるものであるのに対して、事物の基本的様相 *basic aspects of things* にかかわるものであるとされた。¹⁾ つまり、学問世界においては、一般的語彙 *general vocabulary* が、特定の学間の *particular vocabulary* の上位に君臨し、どの学問にたずさわる者も、まずこの一般的語彙を修得しておかねばならないことになっていた。10のカテゴリーはその中で *key terms* になっており、スコラ論理学においては、10のカテゴリーと五つの共通語が知的世界における基本的用語だったのである。²⁾

さて、次にこういうスコラ論理学に対するスミスの態度が検討されねばならない。スミス自身は、類や種などの一般的名称の起原を、「異なった諸対象のあいだに見られる類似性を発見することに快楽を見出す」人間の性向に帰せている。³⁾ しかし、あらゆる学問活動が、スコラ論理学においてみられるごとく、定義、分類、細分類などの行為に還元されてしまうのは、スミスがくみしえないことがらであった。『道徳感情論』では、ストアのゼノンの諸学説を「人為的な諸定義、諸分類、諸細分からなるスコラ的あるいは技術的な体系にまと

感覚的諸性質を特性と付帯性とに二分したものに対応する。本稿52ページ参照。

- 1) 「*Predicables*〔五つの語〕は、科学的叙述 *scientific statements* の境界を定義し限定づける語であり、*Predicaments*〔カテゴリー〕は、現実 *reality* の性質について人間がいだきうる科学的概念 *scientific conceptions* を名づける語であるということができる。」*Ibid.*, p. 19.
- 2) *Ibid.*, p. 21.
- 3) *Early Writings*, p. 36. Cf. 「われわれの身边に生じることがらは、われわれはこれを、そのすべてに酷似している何らかの事物の部類 *species or class of things* に關係させることを好むのであって、前者以上には後者を知らないことがしばしばあるけれども、そうしうることによって、それにより精通したように思い、その性質をより深く洞察したよう思いがちになるのである。」*Ibid.*, p. 37.

アダム・スミスとスコラ論理学

めた」クリュシッポスが痛烈に批判されており、また「深遠で形而上学的な区分にみちている」決疑論の諸著作は、「それをかきたてることが道徳性にかんする書物の主要な効用である諸感情のうちのどんなものも心のなかにかきたてることができない」、つまり本来の目的になんら資するところがないとして、¹⁾道徳哲学体系の場から退却を命ぜられている。さらに「レトリック講義」では、修辞、つまり比喩やことばのあや *tropes and figures of speech* の諸様式、区分、小区分を考察したり、トピックを数多くの種別に分類することが中心となっている旧来の「修辞学書」は「きわめて愚劣であって、まったく有益ではない」と一蹴されている。²⁾

「哲学研究指導原理」(なかんずく「天文学史」)において、スミスはシステムの交替の過程を研究したのであるが、そこで一つの注目に値する点は、学説体系の末期症状の叙述である。新たな体系が旧来のものにくらべて、首尾一貫性、簡潔性などの点においてつねによりすぐれたものとして登場してくるのは、古い体系が「自然の舞台」を理解するよりどころとしては、あまりにも複雑になりすぎてしまっているからである。つまりシステムがシステム自体の本来の意図に反するようになってきているのである。複雑な自然界を理解するための手

- 1) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Bohn's ed., p. 425, 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房, 1973年, 362ページ。スミスはこういうスコラ的な体系を、「にかの道徳的あるいは形而上学的学説のなかに、どんなていどであれ存在したまともな感覚 good sense を消滅させるのに、おそらくもっとも効果的な諸手段からなる、体系であった」とみなしている。Ibid., pp. 425—26, 邦訳362ページ。
- 2) Ibid., pp. 500—501, 邦訳432ページ。Cf. 「決疑論者たちの諸著作については、一般に気分と感情 feeling and sentiment だけが判断すべきものを、正確な諸規則によって指導しようと、役にたたない企てをしたと、いっていいであろう。……かれらがそれをいれる余地のない諸問題のなかに導入しようとくわだてた、些細な正確さは、ほとんど必然的にかれらを裏切って、それらの〔われわれ自身の良心をごまかすような〕危険な誤謬におとしいれ、同時にかれらの著作を無味乾燥で不快なものとした。」Ibid., pp. 499, 500, 邦訳431, 432ページ。スミスはこの決疑論の起源を「野蛮と無知の時代にローマカソリックの迷信によって導入された、耳聴告白の慣習」にもとめている。Ibid., p. 491, 邦訳426ページ。
- 3) Adam Smith, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, ed. by J. M. Lothian, 1963, p. 23, 宇山直亮訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』未来社, 1972年, 98ページ。

アダム・スミスとスコラ論理学

段として System が発明されたのであるが、逆に System を理解する方が、自然界そのものを理解することよりもはるかに甚大なエネルギーが費やされることになる。このことに対応して、一つの学説体系の中で学問活動を行う人々も、ただ「深遠な」体系を要約したり解説することだけが自己の目的と化してしまい、現実の世界とはまったく遊離してしまうようになる。¹⁾スミスは、当時、依然としてアカデミックな世界において影響力を有していた旧来のスコラ論理学体系の中にシステムとしての末期症状を感じとっていたのであった。あらゆる学問分野の出発点におかれ、それらの基礎とされていた「くもの巣のような」スコラ論理学（氣学、本質論）は、新しい、近代的個人を出発点とする学問にとってかわられねばならなかった。スミスは論理学プロパーの分野においては、²⁾新しい試みを行なっていないが、新しい形態での「レトリック講義」を展開することによって、旧来の論理学体系を根底から批判したのであった。

結

論理学とレトリックとは、もともと密接な関係の下にあり、前者は学者の厳密な論説 *tight discourse* をとり扱い、こぶし *closed fist* にたとえられ、後者は弁論者の自由な論説 *open discourse* にかかわっていたところから、掌 *open hand* にたとえられたりした。³⁾そして両者は、伝達の二大技術 *two great arts of communication* とされ、論理学はアリストテレスの、レトリックはキケロの著作が典拠とされていた。論理学が「五つの共通語」や10のカテゴリーのような一般的語彙を重視したのに対応して、レトリックも、主題の発見の

- 1) *Early Writings*, p. 67. 拙稿「アダム・スミスにおける『同感』と『観察者』——スミス『天文学史』の一解釈をふまえて——」『関西学院経済学研究』第5号、1972年12月、5—6ページ参照。
- 2) この試みは、いわゆるスコットランドのコモン・センス学派のトマス・リード、デーガルド・ステュアートらによっておし進められてゆく。W. S. Howell, *Eighteenth-Century British Logic and Rhetoric*, 1971, pp. 372—437.
- 3) W. S. Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500—1700*, 1956, p. 4
- 4) *Ibid.*

アダム・スミスとスコラ論理学

ためのトピックの装置 *machinery of topics* を重んじ、「言葉の衣裳だんす」である修辞、つまり比喩やことばのあやが研究された。これに対して、スミスは抽象的な普遍概念の使用によって論述を展開するのをさけ、個々の具体的な事例から出発しようとする。ミラーは、スミスの論理学講義の内容について次のように言っていた。

「人間精神のさまざまな能力を説明し、例証する最善の方法は、形而上学のもっとも有益な部分であるが、それはわれわれの思想をことば *speech* によって伝達するいくつかの方法の吟味と、説得や慰楽に寄与する文章構成の諸原理への注目から発生する。これらの技術によって、われわれが認識したり感じたりするすべてのことや、われわれの精神のすべての作用が、明確に区別され、記憶されるような仕方で表現され描写される。¹⁾」

つまり *human mind* の能力や作用が、抽象的に語られるのではなくて、古今の具体的な文芸作品をとりあげることによって、個々の事例に即して吟味されてゆき、²⁾ レトリックの基礎に横たわる *human nature* が検討されてゆくのである。³⁾ こうしてスミスは18世紀に生じた新しいレトリックの一形態である文芸

-
- 1) D. Stewart, *op. cit.*, p. 11.
 - 2) スミス、ブレアとともに *New Rhetoric* の代表者とされるキャンベルは、その主著『レトリックの哲学』の序文の中でみずからの意図を次のように述べる。「本書の目的は、一方において、人間精神の正確な地図とはいかなくとも、その相応の素描を提示し、知覚と行動のその主要な諸経路をそれらの源泉にまでたどりつつ、詩人や弁論家がかくも豊かに提供した光の助けによって、人間精神の神秘な運動を明らかにすることであり、そして他方において、言語の使用によって、情報を与え、納得させ、楽しませ、感動させ、あるいは説得させるように聞き手の心に働きかけることを目的とする技術の根本的な諸原理を *human nature* の科学によって、できるだけ正確につきとめることである。」 George Campbell, *The Philosophy of Rhetoric* (1st ed. 1776), ed. with a Critical Introduction by Lloyd F. Bitzer, 1963, Preface, xlivi.
 - 3) 「スミスは、*human nature* における諸発見はレトリックの諸規則と直接に関係をもち、レトリックの諸原理の方は *human nature* への洞察を提供すると考えた。かれは、同感 *sympathy* —— あらゆる *passion* に対する同類感情 —— の心理学的原理は、いきいきとした表現のレトリック的な効能を説明し、*rhetorician* のいきいきとした表現の使用は、同感の性質と起源ならびにその基礎に横たわる想像 *imagination* の精細な作用を明らかにするということを認めた。レトリックと

アダム・スミスとスコラ論理学

レトリック *Belletristic Rhetoric*¹⁾ の登場に重要な役割をはたすことになる。この論理学講座で行なわれたスミスの「レトリック講義」の内容は、かれが1748年から51年にエдинバラで行なった公開講義の中に含まれていたものである。²⁾ このエдинバラ時代にスミスは次のような「導きの糸」*leading principles* をノートにとどめている。

「人間は一般に、政治家や企画家によって、ある種の政治的技術の素材 *the materials of a sort of political mechanics* とみなされている。企画家は、自然が人間界のことがらにおいて作用するのを、途中で妨害する。だが自然がそれじしんの企画を実現しうるために必要なのは、自然がその目的を追求するにあたって、放任し、公正にとりあつかうことだけである。³⁾」

この導きの糸に従って建設される社会が、「自然的自由の体系」であろうが、この*leading principles* には「個と全体」（「個と普遍」）という問題が含ま

belles lettres がさまざまなく精神の能力を説明し例証するのは、こういうふうにしてであるとスミスは信じた。」V. M. Bevilacqua, "Adam Smith and some Philosophical Origins of Eighteenth-Century Rhetorical Theory," *The Modern Language Review*, LXIII, 1968, pp. 562—63.

- 1) D. Ehninger, "Dominant Trends in English Rhetorical Thought 1750—1800," *Southern Speech Journal*, XVIII, 1952, in *Readings in Rhetoric*, ed. by L. Crocker and P. A. Carmack, 1965, p. 305.
- 2) エдинバラ講義では「哲学史」に関するものも行なわれたようであるが、スコットはこれを「古代論理学史・形而上学史」であろうと推定している。W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, 1937, p. 53.
- 3) D. Stewart, *op. cit.*, p. 68. このスミスの言明の、思想史上の意義については、水田洋『近代人の形成』東京大学出版会, 1954年, 128—30ページを参照。
- 4) *Wealth of Nations*, vol. II, P. 184 (IV. ix, 51), 邦訳(下) 148ページ。
- 5) 『道徳感情論』においてスミスは、徳を効用に基づかせる学説をとりあげた際に、それはものごとを「抽象的で哲学的な見方で考察する」傾向におちいるとして次のように述べている。「哲学者が人間愛 humanity がなぜ是認されるか、あるいはなぜ残酷さ cruelty が断罪されるかを検討しはじめるとき、かれはかならずしもつねに、残酷さあるいは人間愛の、なにかひとつの特定の行為についての概念を、ひじょうにあきらかではっきりしたやり方で、自分にたいして形成しているとはかぎらないのであって、ふつうは、それらの資質の一般的な名称 general names がかれに示唆する、あいまいではっきりしない概念 vague and indeterminate idea で満足しているのである。しかし諸行為の適宜性と不適宜性、値うちと欠陥が、ひじょ

アダム・スミスとスコラ論理学

れている。出発点は具体的な状況下の個人であり、全体の秩序は、それらの個々人の行為の結果として、自然的に達成されるであろう。こういう近代的個人への信頼感、これがスミスの「導きの糸」を基礎とする「不变の主題」（グラスゴー大学における諸講義）を支えているものであった。

うに明白で区別しうるのは、特定の諸例においてのみである。特定の諸実例があたえられるばあいにのみ、われわれは、われわれ自身の感受作用と行為者のそれとのあいだの、一致または不一致をはっきりと知覚するのである〔る.〕」*The Theory of Moral Sentiments*, Bohn's ed., p. 270, 邦訳286ページ。